

館山支部だより Vol.102

＜支部連絡窓口＞
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表) 川村 巖
〒294-0032 館山市笠名1357
TEL 0470-22-0230



春の息吹を
感じさせる河津桜
(杜宅の庭先に)

如月(きさらぎ)を迎えますが 謹んで新春のお慶びを申し上げます。
目下、新型コロナウイルス感染拡大の歯止めとして緊急事態宣言が出されて
おりますが依然として予断を許さない状況が続いております。

社会・日常生活の中で強調・実行されてきた「3密防止」のための諸方策
も大きく様変わりしておりますが、感染が「人が媒介・関与する」要素が大き
くワクチンの接種もまだ先のこと、実効性のある精一杯の注意、努力を続け
ようではありませんか。 <川村 記>

支部の活動概要

《12・1月活動実績》

1月初旬 21空群司令への年頭表敬
(OB三団体代表、自肅)
1.30(土) 1月支部役員会(別法、コミセン)

《2・3月活動予定》

3. 3(水) 千葉県隊友会理事支部長会議(千葉市民会館)
3.20(土) 館山市戦没者慰霊祭(鶴ヶ谷八幡宮)
3.27(土) 年度末支部役員会(コミセン)

点 描：コロナ禍での自衛隊災害派遣活動

世界中が「コロナ一色」のような錯覚を受けますが、海外では海賊対処、中東地域情報収集行動や南支那
海での監視行動等々が続けられ、国内では各地で災害派遣対処事案が発生しています。報道されるのはごく
一部に限られ、黙々として任務に従事する部隊・隊員の労苦に報いるためにもそれらの一端を紹介します。

千葉県夷隅市の鳥インフルエンザ対応

昨年12月下旬に夷隅市の養鶏場で発生した大規模な鳥インフルエンザ(115万羽)に対して、千葉県知事
の要請に応じて第1空挺団(習志野)、高射教導隊(下志津)、需品学校(松戸)が災害派遣に出動。
1週間で650名の隊員が8チーム編成・24時間態勢で殺処分に従事し、年末までに任務を終えております。
千葉県隊友会では理事役・関係支部長が現地に激励に赴き、栄養ドリンク等を贈呈しております。

※鳥インフルエンザに関しては、昨年11月から12月末にかけて2箇月間で、九州、四国、中国および近畿の
各地方で計17件の鳥インフルエンザが発生し、 県知事の要請に応じて各県の自衛隊部隊が災害派遣に
出動して全体で310万羽余の殺処分の支援を行っております。 <統幕公式サイトより>

コロナ関連・市中感染対応に係る災害派遣等

各都道府県知事の要請により、コロナの感染拡大防止対応として、自治体職員
・宿泊施設従業員等に対する感染防止教育、患者の輸送、採血・検査等の医療
支援、医療施設の提供等々、支援内容や規模・活動期間は異なりますが、昨年
4月以降80件余の支援活動に従事しております。 <防衛省公式サイトより>
ほか新潟地域の豪雪災害派遣などがありますが紙面の関係で割愛すること
にします。 <川村 記>

レクイエム

11.29 安西久雄会員(海、機関職種) ご逝去(享年68歳)

謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈り致します。 <支部会員一同>

令和3年度会費等の納入について

県隊友会の会費納入の時期になりました。年会費または会運営協力費
(寄付金、旧終身会員)について、会務運営上かけがえのない財源ですの
で趣旨ご理解いただき3月末までに納入お願い致します。

<支部事務局>

寄稿：「コロナワクチン・なぜもっと早くできないの？」

新型コロナの感染拡大の勢いが止まるところを知らず、今週ついに世界中の感染者数が1億人を超えたとのこと。 毎日の「過去最多とか最多
更新」の報道に出るのはため息のみです。加えて変異コロナウイルスの出現は火に油を注ぐような感じです。

一方で英国や米国、中国などではすでにワクチンの接種が始まっており、日本でも2月下旬には接種を開始し、6月を目途に広く一般にも接種
を行うための準備が進められているようです。 ワクチンをめぐっていろいろ取沙汰されているようですが、とにかく現時点では窮状打開の特効薬、
頼みの綱とも言うべきワクチン接種の実現が待ち望まれるものです。

ワクチンの開発には10年以上かかる！？

なぜこんなに手間取るのか、長い期間を要するのか、じれったかったので自分で調べてみることにしました。よく「治験」という言葉が使われており
ますが、言い換えれば人体実験？、いわゆる「臨床試験」によって人体への安全性と有効性を”完全に”確認することが不可欠とされているのです。

この臨床試験には第一段階から第二、第三段階があるそうで、第一段階の臨床試験はごく少数の健康体の成人を対象とし、第二段階になると
数十から数百人規模、そして第三段階では数千から数万人規模の投与と言われております。
基礎研究(動物実験など)から人体に投与する臨床試験を経て、最後の関門は薬品としての製造と販売のためのしかるべき機関の認可を受ける
ことが必要ということで、日本では厚労大臣が認可権者に指定されていることはご承知のことと思います。

費用の問題はさておいて認可を受けるまでに最低10年から15年かかると言われております。現在、世界で約70種類のワクチンの開発研究が
進められているということですが、申請して実際に認可されるのはその十分の一以下だそうです。大変なことですね。

なにしろ微妙で繊細な人間の身体・生命に関わること、これだけのプロセスと期間が必要なことは納得できたような気がします。

それでは英・米はなぜこんなに早く接種できたの？ 困りましたね、第二・第三の臨床試験を省略したのか、それとも国の法律・制度の違い？

もう20年以上前のことですが、自衛隊を定年退職後勤めた損保会社で企業・工場のリスク調査に従事したことがあります。東京郊外の製薬会社
の調査で、窓のない大きな倉庫のような3階建てのレンガ造の建物に目が留まり、聞くと「動物棟」とのことでした。 雑菌の持込み厳禁ということで
建物に入る前に全身の消毒と防護衣着用、完璧な隔離環境で飼育されたモルモットなどの小動物でなければ製薬には向かないということでした。
調査後の座談会で顧客の営業部長が嘆いていた「製薬というのは実に割に合わない仕事」の真意が今になって理解できたような気がします。

悩ましい中国の内情

折しも中国の武漢で世界保健機構(WHO)の調査団によるコロナに関するヒアリングが始まったようですが、中国側がどこまでWHOの要求に
応じるのか、本当のデータを提供してくれるのか大いに疑問というよりは悲観的な見方しかできないようです。

欧米の医療専門家の間ではワクチンの臨床試験の第二段階で一番進んでいるのは中国という見方が多いようです。欧米では数年かかると言わ
れる臓器移植のためのドナーの入手がいたもたやすく(1日)できるという話などを考え合わせた場合、そこには「ウイグル民族の問題」が絡んで
いるのです。 ウイグル自治区で行われている強制監禁・虐待問題、日常生活・行動の監視、強制的な血液採取・人体データの蓄積等々、これら
はワクチン開発の臨床試験(言い換えれば人体実験)と密接に関係していると思うのです。 何かと不透明な話題の多い国ですね。

あまり深入りすると「内政干渉」とニラマレルのでこのへんにしておきますが、もっと突っ込んで調べてみたいと思います。

<会員(海)、匿名希望>

物騒な話？「館山での毒ガス訓練・その真偽は」

以前、この欄で館山砲術学校(佐野)の「細菌兵器訓練」の話を紹介したことがある。簡述すると、本土決戦に備え米軍の上陸候補地の一つと
して想定された平砂浦海岸で、細菌を波打ち際に散布する訓練が度々行われていたと言う。 この話は砲術学校出身予備学生 of 戦後の証言を
ある雑誌社がスクープしたものであるが、常識論で考えてみた場合、波打ち際に細菌(大腸菌とかいう話)をバラまいて上陸してくる米兵が本当に
バタバタ倒れてくれるのだろうか。新型コロナウイルスにせよ、細菌・ウイルスには「潜伏期間」があることは小学生でも知っていることである。
荒唐無稽と言うか実にたわいない馬鹿げた話で、記録資料をを調べるまでもなく幼稚な「ウソ」、「作り話」と断定できよう。

状況は異なるが、数年前、ある建築業者が館山在住の元州ノ空(州ノ埼海軍航空隊・大賀)教官宅を訪ね、療養施設とかを建てる予定地
(旧軍の払い下げ地)に、州ノ空が終戦時大量の毒ガス(弾?)を埋めたという話を伝え聞いたとかで、その真偽を確認したいとのことであった。

海軍の「化学兵器(毒ガス等)」の実態を探る

昭和5年に海軍技術研究本部に化学研究部が発足(平塚出張所)し、毒ガスの研究に着手したのが海軍の化学兵器研究の元祖と言われる。

昭和18年にこれを母体として広大な敷地に相模海軍工廠が設立され、防毒用器材(防毒面等)の生産に着手した。

また館山砲術学校に「化兵科」が新設され、陸戦(陸上戦闘)で部隊の指導的な役割を担う館山砲術学校は、昭和19年11月に「対(對)化兵戦
教範草案(案)」(写真参照)を編さんして化兵訓練の指針として全部隊に配付している。

※「対化兵戦」とは、敵から化学兵器による攻撃を受けた場合の防護戦闘を指すもので、教範では化学兵器を「毒ガス」に限定している。

また教範(案)では、「訓練には”実毒”を使用することが望ましい」としている。 実毒とは”本物の毒ガス”のことである。しかしながら「使用に際し
ては熟練した指導者の下、細心の注意と防護措置を講じるべし」と記述されている。

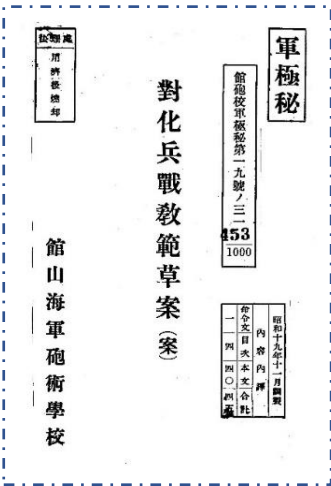
とは言え、この時期毒ガスに精通・熟練した指導者にせよ、信頼できる完全な防護手段(防護衣、除毒具等)が行き渡っていたとは到底思えない。
実際に各部隊に供用され、訓練で使用されていたのは、刺激臭や催涙性が強いが毒性のない「試薬」と称する薬剤であったと言われている。
冒頭にあげた州ノ空が(終戦時)大量の毒ガスを地中に埋めた話の真偽もあえて穿鑿(せんさく)するには及ばないであろう。

序に

日中戦争で日本軍(陸軍)は中国軍(国民党軍)に対して毒ガスを使用した。日本軍が実際に行った唯一の「化兵戦」であろう。

また、日中賠償協定の一環として終戦時日本軍が遺棄(地中に埋めた)した毒ガス弾等の処理が、多くの労力・経費を費やして
現在もなお続けられている。 旧軍の化学兵器に関する多くの人々理解・認識は、この日中戦争時の毒ガス使用と終戦時の処理
に(考え方の)影響を多分に受けている面があると思う。

「一事が万事」で物事を推し測って判断・処理し、「三つ子の魂百まで」他人の言や風聞を頑なに信じ込むことなく、疑問を持つて
一歩でも突っ込むことが大事だと思うのである。 <自称地域史探索マニア その28>



<記 事> 館山海軍砲術学校が
編さん(起草)した教範草案(案)
「教範」は海軍大臣が制定する
ものであるが戦況の逼迫状況
から制定に先立って「案」の段階
で全部隊に配付された。